

JACET (大学英語教育学会) 英語辞書研究会小史 (1995年12月—2007年3月)

村 田 年

1. はじめに

英語の辞書がある研究者の主たる専攻分野になり得るという意識は近年のもので、当研究会の発足時である1995年頃をみても、わが国においては、辞書の記述についての語法的な研究は数多く見られたものの、辞書編集、辞書全体の記述内容についての共時的な研究は学術研究に値するかどうかの問題がまだ片付いていなかったように思われる。大学の講座を見ても、「辞書学コース」といったものは存在せず、組織的な辞書学の講座もほとんどなかったようである。

さらに下って1999年の国際応用言語学会 (AILA) 東京大会の全発表における辞書学関係の件数を見ると、シンポジウム97件 (1)、研究発表817件 (5)、ポスター発表125件 (1) (カッコ内が辞書学関係の発表数) の1,039件のうち辞書学関係の発表は7件で、応用言語学36分野のうち最も少ない部類の発表数であった。1970年代から90年代にかけて日本における辞書編集の活発化、海外における辞書学会の創設、辞書研究の隆盛にもかかわらず、日本における辞書学は、個々の研究としては優れたものが存在したにも関わらず、開かれた情報交換の場がほとんどなく、辞書研究人口がどのぐらいで、どこにどのような人がいるかは、はかりかねる状況であったと思われる。

わが国には早くから岩崎研究会という研究団体が存在し、紀要*Lexicon*を刊行し、中心メンバーがチームを組んで、英米の主な辞書が刊行・改訂されるごとに極めて詳細な分析を行い、輝かしい業績を積んでこられた。しかしながら、その業績が研究に志そうとする人たちに広く知られていたか、と言うと必ずしもそうではなかったと思われる。『英語の辞書と辞書学』(南出康世著。大修館書店)を初めいくつかの研究書も啓蒙的な役割を果たし、若い学徒を辞書の研究へと導いたことは喜ばしいことであるが、若い研究者の発表の場は限られていた。

このような状況の中、辞書研究に志す人たちにいささかでも貢献できればとの意図で当JACET英語辞書研究会は創設された。

2. JACET英語辞書研究会の歴史

※1) 当研究会の催しに経年順に番号をふり、引用の便宜をはかった。2) 当研究会と密接な関係を持った催しは「関連情報」のラベルを付して掲載した。

2.1 発足当初の小さな会から大きな発表の場の提供へ(1995年—1996年度)

1994年の秋の頃からJACET理事会・研究企画委員会合同会議において、何度かにわたりAILA(国際応用言語学会)東京大会を1999年8月に主催するに当たり、日本における応用言語学の水準を示すような催しを持ちたいとの話し合いがなされた。そのとき筆者は、自分の専攻分野である英語辞書学について、何らかの研究発表の企画を立てられないものかと考えた。研究会を作ろうと思ったもうひとつの理由は、われわれは、辞書に関する研究成果を発表する学会・研究会がなく、この分野の研究者は自分が研究していることが学問として成立するのかどうかという問題をかかえていたので、グループを作って発表しあうことは大いに意味のあることと考えたことである。

そのような折、1995年夏に勤務先の学生を引率してメルボルンのモナッシュ大学へ行き、かの地の社会言語学研究会に参加し、その運営方法、特に全員参加、まだアイデアの段階でも発表して、みなに叩かれることによって研究に弾みをつけるといった点に興味を持った。

そのように考えながら、私は先ず南出康世氏に相談した。氏の発案で、辞書編集の理論的な課題と同時に実際的な課題の両方を目的とし、筆者の懸案である全員発表というスタイルの研究会を立ち上げることにし、JACETの会員名簿から30名ほどに連絡した。

● [1] 1995年12月20日(創立総会) 場所: JACET本部事務所。出席は6名。以下の事項を審議し、決定する。

1. 代表: 村田 年、副代表: 小林ひろみ

2. 研究会の目的: (1) 関連諸科学を基盤として、英語辞書学の理論的な研究を行う。(2) 英語辞書編集の実際上の課題(見出し語、定義、文型表示、コロケーションなど)を研究する。

3. 会合の持ち方: 学習会・輪読会形式ではなく、会員個々の研究成果の発表及び問題点の提示の場とする。

1) 現在行なっている研究や最近紀要などに発表した研究を発表する。現在研究デザイン形成途上のものでもよい。

2) 各発表について相互に意見交換をする。(発表30分、意見交換20分を基本とする) 研

究方法、デザインに関する alternative な方法の可能性や、同じテーマの別の視角の可能性を交換する。

- 3) 発表者は発表論文、または研究途上のアイデアの目的、方法、分析と考察/途中経過、今後の展望・課題を記したレジюмеを用意する。(単なる一つの研究発表というよりもその人の研究の手の内を示して広く意見を求めるものとする。)
 - 4) 多忙なため発表予定のない方の参加も歓迎する。全体としてリラックスして自由に意見交換ができるようにしたい。
 - 5) 以上の発表と意見交換を通して、
 1. 参加者各自の研究を、一歩進め、または多角的に見直す場を持ち、より豊かに進める一助とする。(論文を読んで意見を言ってくれる人はなかなかいないので、よいチャンスになるであろう。)
 2. 会員一人一人の研究の充電の場とする。
 3. 会員間の研究ネットワークを形成する契機とする。
 4. ここから共同研究が始まる芽を育てることにもつなげる。
 4. 主な研究会会場：JACET本部事務所。
 5. 研究会日程：毎月1回または隔月1回。
 6. 会費：当分の間徴収しない。(JACETから郵送費の補助がある。)
- [2] 1996年3月11日(例会) 村田 年「辞書と語用論—辞書に見る話し手と聞き手の関係(会場：JACET事務所) 司会：小林ひろみ。参加者8名。
 - [3] 1996年5月11日(例会) 投野由紀夫「英語学習辞典とユーザー」(同上) 司会：村田年。参加者10名。
 - [4] 1996年7月6日(例会) 小林ひろみ「和英辞典作りの実際」(同上) 司会：村田年。参加者7名。
 - [5] 1996年10月29日(例会。語法研究会と共催) Stephen Bullon (University of Birmingham), *Looking at Language on More Ways than One*. JACET本部英教会議室。司会：森戸由久。35名。
- 例会は予想以上に参加者が少なかったので、シンポジウムを企画してはどうかと関西方面の方々にもはかると、賛成が得られ、JACETへ旅費補助の申請も出せたので、実行した。
- [6] 1996年12月14日(シンポジウム) 旺文社地下会議室において「英語辞書編集と今日的課題(1)」をテーマに開催した。司会：村田年、提案者：赤須 薫「語義とコロケーション」、井上永幸「文法・語法の記述とコーパスの可能性」、南出康世「英語辞書における言

語的差違の記述」。参加者66名でたいへん盛会で、会場は熱気を帯び、質疑の時間を2度延長した。

- [7] 1997年3月22日(例会) 山田 茂「学習英英辞典の動向と問題点」(JACET事務所) 司会: 村田年。出席者20名。

2.2 海外の辞書学会との交流(1997年度—1998年度)

- [8] 1997年6月7日(例会) 成田真澄「機械翻訳と機械処理用辞書について」(同上) 司会: 村田年。出席者8名。
- [関連情報] 1997年8月27—30日 国立国語研究所のシンポジウム「言語研究と世界のシソーラス (*Language Study and Thesaurus of the World*) が開かれた。主催: 国立国語研究所、場所: 国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議室。内容: 中野 洋(国立国語研究所)「『分類語彙表』と日本語研究」、R.R.K. ハートマン(英国・エクセター大学)「意味研究」、ヨリック・ウィルクス(英国・シェフィールド大学)「語彙体系と概念体系」、李 行健(中国・社会科学院語言文字応用研究所)「中国の辞書の系譜」、トム・マッカーサー(英国・オックスフォード大学出版局)「世界のシソーラス 英語のシソーラス」、荻野綱男(東京都立大学)「日本語のシソーラス」(※総計24の研究発表と8の講演があった。)

これは壮大なシンポジウムであり、同時にわれわれが望んでいたヨーロッパ辞書学会の中心人物2名との交流の好機でもあった。国立国語研究所から内々の許可も取れ、Hartmann、MacArthur両博士と交渉し、企画を進めた。

- [9] 1997年8月26日(講演会) Tom McArthur, *Guides to Tomorrow's English: The Shapes that Dictionaries and Other Works of Reference Have Begun to Take on, in order to Cope with English as a Universal Language*. 司会: 村田年、紹介: 山田茂。(会場: 早稲田大学、出席者34名。)
- [10] 1997年9月5日(シンポジウム)(JACET大会の中で)(会場: 早稲田大学) テーマ: *English Learners' Dictionaries and Users*. Chair: MURATA, Minoru; TONO, Yukio: *The Role of Illustrative Examples in English Learners' Dictionaries: An Experimental Approach*; HATAKEYAMA, Toshikazu: *English-Japanese Dictionaries and College Students: Based on an Analysis of Questionnaires to College Students*; ASAO, Kojiro: *Learners' Corpus and Bilingual Dictionaries*. Supervisory Commentator: R.R.K. Hartmann (Exeter University)。出席者120名。
- [11] 1997年9月6日(講演会) R.R.K. Hartmann, *English Learners' Dictionaries*. (会

場：早稲田大学。JACET大会の招待講演として。) 司会：南出康世。出席者110名。

このシンポジウムと講演会の企画は成功した。ヨーロッパ辞書学会創立者を迎えて、ヨーロッパの辞書研究の学界が近くなったばかりか、ホンコンに本部を置いたアジア辞書学会運営の現状やアメリカ、オーストラリア、あるいはアフリカの辞書研究の現状まで情報が得られた。

- [12] 1997年12月13日 (ワークショップ) 「英語の辞書」発表者40名。会場：京都外国語大学。テーマ：「英語の辞書、特に学習辞典について」形式：発表会場を4室取り、参加者全員が発言するセミナー形式を取る。第1室(851室)：辞書編集に関わる諸問題(定義・コロケーション・コーパスなど)、第2室(852室)：辞書と語法、第3室(853室)：辞書とユーザー・英語教育の観点から、第4室(854室)：辞書の解題と批評・通時的考察。

出席者160名、懇親会出席者71名。参加者は、発表、司会、世話役、あるいは質問のいずれかで参加の姿勢を示そうとの会(ワークショップ)の意図が理解され、盛会で、質疑も盛り上がった。時間がきちんと守られ、発表のキャンセルもなかった。関西方面の会員が大幅に増えた。

- [13] 1998年3月27日(例会) 小室夕里「*Longman Essential Activator* 編集とレキシコグラファー養成の問題」(会場：早稲田大学) 司会：村田年。参加者25名。

2.3 ワークショップ(研究発表大会)が定着する(1999年度—2000年度)

初めて例会を関西で開くことにした。ワークショップと違ってゆっくり関西の研究者と話し合うことができ、有意義であった。関東からの参加者も5名ほどあった。

- [14] 1998年6月4日(例会) 濱嶋 聡「オーストラリア英語辞書学：Macquarie 辞書とDictionary Research Centre」、南條健助「学習英和辞書における最適な発音表記とは」(会場：園田学園女子大学)。司会：南出康世。参加者約25名。

- [15] 1998年9月12日(シンポジウム) JACET大会(就実女子大)のシンポジウムのひとつとして、テーマは「学習辞書と用例」とし、司会を赤須薫氏、提案者として土家裕樹、土肥一夫、山田茂の諸氏にお願いした。約70名の参加者を得て、用例についての議論を深めることができた。

- JACET英語辞書研究会のホームページ：この頃土肥充氏担当でホームページを上げることができた。当辞書研究会発足の趣旨、会合の持ち方、各例会、ワークショップ等の案内及び活動報告、その他の連絡のすべてが載るようになった。

- [関連情報] 辞書学メーリングリスト：井上永幸氏がMLを上げてくれ、この頃で100数十名の参加者がおり、毎日活発な議論が展開されて、MLと辞書研究会が相まって英語辞

書研究の世界を非常に活発なものにしてくれていると多くの人から言われた。

- さらに辞書研究会は、東北大学の後藤齊氏を通して「国内言語学関連研究機関WWWページリスト」とリンクし、さらにこれは「国内人文系研究機関WWWページリスト」ともリンクできた。ヨーロッパ辞書学会 (EURALEX)、北米辞書学会 (DSNA)、アジア辞書学会 (ASIALEX)、オーストラリア辞書学会 (Australlex)、国立国語研究所、湖南大学 (日中・中日辞典) 等とはメール交換による連絡を取っていた。
- [16] 1998年11月28日 (ワークショップ) 「英語の辞書」をテーマに研究発表54件をそろえて早稲田大学で開催された。出席者147名、懇親会参加者54名で、すでにワークショップは定着した感があった。
- [17] 1999年3月20日 (例会: シンポジウム) 「英和辞典の発音記号と日本人のための音声表記」をタイトルに、早稲田大学において。発案者: 村田年、司会は國吉丈夫、提案者及びタイトルは、湯澤伸夫「IPA表記とカナ表記の相補的利用—DVD-ROMの活用を視野に入れて—」、南條健助「英語音声学から見たカナ表記の有効性と限界」、島岡丘「日本語を生かしたカナ表記この10年—自信と希望が湧く21世紀英語発音教育」。参加者約50名で盛会であった。
- [関連情報] 1999年2月13日 (寄付集め) ドクター・ジョンソンの家改修工事支援募金について、永嶋大典氏 (Dr Johnson's House Trust 理事) より依頼があり、会員に流して相当の寄付金を集めることができ、われわれもジョンソンの家改修に協力することができた。
- [18] 1999年8月6日 (シンポジウム) AILA (国際応用言語学会) 東京大会のシンポジウムの1つとして。早稲田大学にて中国、韓国から提案者を招き、開催した。司会は村田年、提案者は、CHI, Amy (Hong Kong University of Science and Technology, China), HAN, Young-Gyun (Ulsan University, Korea), MIYAI, Shoji (宮井捷二) で、テーマは *Bilingual Dictionaries in Asia: Past, Present and Future* であった。中国、韓国、日本の二カ国語辞典 (特に英語) の現状と問題点を挙げて、共通の問題について議論し、将来の研究協力関係の方向を模索した。参加者は約30名で、活発な質疑があった。
- [19] 1999年8月1-6日 (ポスター・セッション) これもAILAの催しの1つとして、ポスター発表を出した。提案者は、西村公正 (責任者)、須賀廣、鷹家秀史、関山健治で、テーマは "Problems of Dictionary Users and Teachers' Role" であった。日本人英語学習者は英和辞典・英英辞典をどう使っているか、辞書編纂者の執筆の工夫がどう受け止められているか、について数百人の学生の辞書利用の実際を明らかにしたものである。

- [20] 1999年10月30日 (例会: 座談会) 「辞書編集と辞書研究—Exeter と Birmingham に学んで」をテーマに自由な話し合いをしていただいた。司会は村田年、講師は、大杉正明、東海林宏司であった。この座談形式は聞き手にたいへん受けがよかった。出席者は約50名であった。
- [21] 1999年12月11日 (ワークショップ) 「英語の辞書」をテーマに研究発表45件、46名を集めて再び関西の園田学園女子大学を会場に開催した。出席者は115名で、いつもながら懇親会参加者が多く55名でなごやかな歓談のひとつときを楽しんだ。
- [関連情報] 2000年2月20日 大学生のための語彙表として定評のあった『JACET基本語4000』を改訂しようとの提案があり、当辞書研究会を中心に全国的に参加者を募集して、改訂に当たるプロジェクトが立ち上げられ、本研究会の主要メンバーも多くが参加した。
- [22] 2000年3月29日 (例会: シンポジウム) 「和英辞典を考える」をテーマに司会を村田年が務め、提案者・タイトルは、中本恭平「和英辞典の存在意義」、小林ひろみ「和英辞典の編集、特に用例の収集・作成・記述」、中尾啓介「和英辞典編集上の問題点」であった。出席者は53名で活発なやり取りがあった。
- [関連情報] 2000年5月27日 (協賛) JACET基本語改訂委員会の設立総会を兼ねての講演会に協賛した。結局のところメンバーの大部分は当辞書研究会と共通であった。講師・タイトルは竹蓋幸生氏「日本人学習者のための英語基本語彙」で早稲田大学で開かれた。日本人として英語で仕事をしていくことを考えた場合、基本8,000語がひとつの目安ではないかとの示唆が講師よりあった。総会提案: 村田年「新JACET基本語の枠組み、作業手順、及び日程」出席者は53名であった。
- [23] 2000年7月8日 (例会) 早稲田大学を会場に、竹蓋順子「語彙力を伴ったコミュニケーション能力の養成—複合システムの開発およびその指導効果について—」、相澤一美「リーディングにおける語彙の偶発学習」を拝聴した。参加者は約50名であった。
- [24] 2001年3月26日 (ワークショップ) 清泉女子大学を会場に発表20件、シンポジウム1件で構成した。今回初めて全体シンポジウムを試みた。講師はAlan Turney、八木克正、小沼利英で、テーマは*Bilingual Dictionary: With Particular Reference to English-Japanese and Japanese-English Dictionaries*で、司会は赤須薫が担当した。出席者は94名。
今回は「国際辞書学セミナー」と連動させて開き、このシンポジウムにも3名の招聘講師にコメンテーターとして参加していただいた。
- [関連情報] 2001年3月27—29日 (セミナー) 引き続き清泉女子大学で、Dr. Reinhard Hartmann, Dr. Tom McArthur, Mr. Michael Rundellを講師に、第15回国際辞書学セミ

ナー実行委員会主催のもとに国際辞書学セミナーを開催した。会計関係以外は当研究会主催といってもよいメンバーであった。運営委員長：大杉正明。予想通り満杯の参加者を得て、内容はたいへんよかったとのことばがたくさん寄せられた。

- [関連情報] 2001年3月30日(協賛：講演会) Tom McArthur, *The New World English Dictionaries: Some Implications for ELT Lexicography in Japan and Elsewhere*. (会場：東京電機大学) 司会：村田年。紹介：小室夕里。出席者は27名。JACET主催であったが、役員会とぶつかり、参加者は予想したほどではなかった。

2.4 アジア辞書学会を射程に入れる(2001年度—2003年度)

- [関連情報] 2001年8月8-10日 第2回アジア辞書学会大会(The Second ASIALEX International Congress)が韓国ソウル市 Yonsei University において開催され、16カ国以上から参加者を集め、日本からは17名の発表がなされ、盛会であった。Plenary Speechの1つに、Minoru Murata, *Reading, Vocabulary Acquisition and Bilingual Dictionaries for Learners*があった。総会において次回(2003年度)は日本で開催することが決定された。
- 2001年12月1日 今まで土肥充氏にお願いしていたHPを改訂し、事務局体制を強化した。英語辞書研究会事務局：村田年(全体)、山田茂(例会担当)、土肥充(HP担当)、石川慎一郎(ML担当)として再出発したが、大学のサーバーの関係でHPは間もなく接続中止となった。
- [25] 2001年12月15日(例会)講師・演題は Halpern Jack(春遍雀来)「辞書編纂に於ける語彙データベースの役割」早稲田大学にて。司会：村田年。出席者は15名で少なかったがじっくり話を伺うことができた。
- 『英語年鑑2001』(研究社出版)に堀内克明氏によって当英語辞書研究会の活動が詳しく報告されることになった。以後毎年報告され、辞書研究が研究分野として一般に認知されるようになったことは喜ばしいことである。発表者の業績評価としてもプラスに働くことが期待される。
- [関連情報] 2002年3月25日(協賛)当研究会の活動メンバーを中心に「電子辞書研究会」(代表：村田年)を創り、第1回例会を開く。講演：小川貴宏。参加者33名。
- [26] 2002年3月27日(ワークショップ)「英語の辞書」をテーマに発表30件を集めて明海大学において開催される。参加者は約100名であった。
- [27] 2002年10月26日(例会)金指 崇 “*User’s Guides in English-Japanese Dictionaries for Learners, with Particular Reference to Grammatical Information.*” 明海大学。司会：村田年。参加者は15名。

- [関連情報] 2003年3月15日(協賛) 第2回電子辞書研究会をカシオ計算機株式会社会議室にて開く。講演: 磐崎弘貞、佐藤弘明。参加者: 33名。
- [関連情報] 2003年3月25日にJACETから『大学英語教育学会基本語リスト』(*JACET List of 8000 Basic Words*) (略称「JACET8000」) が刊行された。これは当研究会会員を中心に参加者を募った仕事であった。
- [28] 2003年6月28日(ワークショップ) 新刊各辞書の編者におし、[「新刊英和・和英辞典のワークショップ」を開いた。講師は、田中茂範(『Eゲイト英和辞典』)、赤須薫(『ルミナス英和辞典』)、花本金吾(『レクシス英和辞典』)、赤野一郎(『ウィズダム英和辞典』)、阿部 一(『アドバンスト フェイバリット英和辞典』)、南出康世(『ジーニアス英和辞典』)で、参加者は約200名であった。(会場: 早稲田大学)
- [関連情報] 2003年8月27-29日 第3回アジア辞書学会東京大会(The Third Biennial Conference, the Asian Association for Lexicography—ASIALEX) (会長・運営委員長: 村田年) の開催は当研究会の総力を傾けて準備してきたもので、情報の伝達も受入れ準備もたいへんよかったとの評価を得た。世界10数カ国から233名の出席者を得て、招待講演7件、シンポジウム6件、研究発表58件、ポスター発表12件、全発表者144名で盛会であった。詳細はASIALEX '03 Tokyo Proceedings: *Dictionaries and Language Learning: How can Dictionaries Help Human & Machine Learning?* (co-edited by Minoru MURATA, Shigeru YAMADA and Yukio TONO) を参照されたい。
- [関連情報] 2003年11月22日(協賛) 第3回電子辞書研究会を早稲田大学にて開く。講師: 関山健治。参加36名。この会合のあとで、アジア辞書学会東京大会の反省会が開かれた。

2.5 国際的な辞書学セミナー及び論文集の刊行(2004年度—2006年度)

- [関連情報] 2004年3月26日(協賛) 電子辞書研究会第1回公開講演会。講師16名。参加者204名。2つの講演会場はどちらもいっばいで、一般の関心は書籍版辞書から電子辞書へと移ってきてつつあることが感じられた。(於 早稲田大学)
- [関連情報] 2005年3月25日(協賛) 第4回電子辞書研究会がカシオ計算機株式会社において開かれた。講演: 山内豊、村田年。
- [29] 2005年3月26日(共催: ワークショップ) 「英語の辞書・語彙」のテーマのもとに東京電機大学において開催される。研究発表60件、参加者は多く208名。初めてJACET英語語彙研究会との共催によって発表者が急増し、バラエティーに富んだ大会となった。
- [関連情報] 2005年6月1-3日 アジア辞書学会第4回大会が Singapore の M Hotel で開かれた。基調講演: TONO Yukio, *Exploring the Potential of Learner Corpora for*

Pedagogical Lexicography. 日本人研究発表者は23名で盛会であった。

- [関連情報] 2005年12月10日(協賛) JACET英語語彙研究会第2回大会が中央大学後楽園キャンパスで開かれた。基調講演: Paul Meara, *Growing a Vocabulary and Estimating Productive Vocabulary Size*. 研究発表者39名、参加者は96名で盛会であった。
- [関連情報] 2006年3月24日(協賛) 第5回電子辞書研究会がカシオ計算機株式会社において開かれる。講演: 春遍雀来、小川貴宏、村田年。
- [30] 2006年3月25日(ワークショップ)「英語の辞書と語彙」と題して和洋女子大学で開催された。発表者45名、参加者139名で盛会であった。和洋女子大学外国語センター(センター長: 服部久美子氏)の全面的な協力を得た。
- [31] 2006年10月7日(例会: 対談)「英国辞書学事情—バーミンガムでの1年」と題して在外研究でバーミンガム大学へ行かれた2名の講師から、英国での生活事情、辞書研究、大学の辞書学講座、研究者との交流、観光について肩のこらないお話をいただいた。講師: 赤須薫、山田茂、司会: 村田年。
- [32] 2006年11月11日(セミナー) 英国よりHoward Jackson教授(University of Central England, Birmingham)及びMichael Rundell氏(辞書編集者)を招聘し、辞書学セミナーを東洋大学で開いた。満杯の45名の参加を得て盛会であった。JACETより補助があった。司会: 赤須薫。講義のタイトルは、Jackson (1) English Dictionaries: Producers and Consumers; Rundell (1) Developing and Querying Your Own Corpus: the State of the Art; Rundell (2) Finding Word Senses; Jackson (2) Issues concerning MLDs; Comments on Papers in *English Lexicography in Japan*であった。
- [33] 2006年11月12日(講演会) 上記両講師による一般向け辞書学講演会を開いた。参加者は15名で少なかったが、長時間にわたってじっくり講演を伺うことができた。司会: 赤須薫、山田茂。講演のタイトルは、Michael Rundell, *Designing and Exploiting a Lexicographic Corpus: the Key Issues*; Howard Jackson, *Learner's Dictionaries and Native-Speaker Dictionaries*. であった。
- [34] 2006年12月10日(出版) 創立以来の懸案であった論文集を刊行し、広く海外にわが国の辞書研究の水準を示すことができた。The JACET Society of English Lexicography, *English Lexicography in Japan* (Edited by S. Ishikawa, K. Minamide, M. Murata and Y. Tono. Taishukan Publishing Company.) 11年間積み立てた刊行資金にJACETからの補助、各方面からの寄付を加えて刊行した。海外の研究機関、研究者を中心に115部を献呈し、書評・反応を得ている。イスラエルの Kernerman社刊行の *Dictionary News* に

石川慎一郎による紹介とGeorgia 大学のDon R. McCrearyによる詳細な書評が掲載された。

- [35] 2007年3月25日 (ワークショップ) 「英語の辞書と語彙」と題して研究発表38件、41名を集め、1996年の第1回ワークショップを開催した京都外国語大学において再度開催した。参加者は98名で盛会であった。しかし、語彙研究会との別々の開催が発表者、参加者ともに少なくしていると思われ、この点が検討課題となった。
- [関連情報] 2007年3月29日 (協賛) 第6回電子辞書研究会開催に協賛した。講演：小山敏子、小川貴宏、小林雄一、森口稔。参加者は35名。
- 2007年3月31日 当研究会の代表の交代。1995年の創設以来ずっと代表を務めてきた村田年が退任し、赤須薫が代表となる。副代表は山田茂、会計は川村晶彦。運営委員は、石川慎一郎、井上永幸、磐崎弘貞、小室夕里、投野由紀夫、畠山利一。

3. おわりに

当研究会の発足当初は、辞書を研究題目にすること自体が少々引け目を感じるところがあり、辞書研究を自らの専攻領域としている研究者は少なかった。JACET学会名簿2,700名の中でも8名ほどであった。それらの方々に加えて、英語学、英語教育の分野から、また岩崎研究会の会員から選んで30名ほどに連絡し、12、3名で当研究会は発足した。

その後全国的なシンポジウムを開き、自らが発表を望んでいる人が多いことに気がつき、ワークショップ (研究発表大会) を開いて、100数十名が会員、ないしは準会員という雰囲気ができ上がり、いろいろな企画が組みやすくなった。

その後ヨーロッパ辞書学会の創立メンバーを招聘し、常に活動報告を海外の辞書学会に通知していたので、アジア辞書学会の運営メンバーとも連絡がつき、小さいながらもいつも海外に目を向ける研究会に育っていったことは好ましいことであった。

当研究会は、発足の1995年から2007年3月までの11年間ずっと村田が代表を務めてきた。副代表は前半の6年間で小林ひろみ、後半の5年間で山田茂で、事務局は、村田年、山田茂、投野由紀夫が当たり、重要事項を相談する「世話人」(のちに運営委員) を置いた。当初の世話人は、赤野一郎、井上永幸、小林ひろみ、南出康世、村田年、投野由紀夫、山田茂であった。その後少しずつ世話人を増やしていった、最終的には英語辞書学の中心の方々でかためることができた。ここに記して感謝の意を表したい。

運営委員：赤野一郎・赤須 薫・浅羽亮一・畠山利一・井上永幸・石川慎一郎・磐崎弘貞・加藤和男・小林ひろみ・南出康世・宮井捷二・村田 年・大杉正明・投野由紀夫・八木克正・山田 茂。

会の運営方法は、1つ1つの仕事を相談したり、分担したりすることが困難で、日常の準備や事務は代表がひとりで行ってきた。しかし、例会、ワークショップ当日は会場校の委員に、事務局の方々に、その他の一般会員にも手伝っていただいた。ML、HPの運営、プログラムのデザイン等はその能力を持った方をお願いした。MLについては当研究会とは別のものであったが、井上永幸氏の英語辞書学メーリングリストを利用させていただき、途中からは石川慎一郎氏をお願いした。HPは土肥充氏をお願いして千葉大学のサーバーを利用してしたが、途中段階で利用できなくなってしまった。

そのような片手間仕事ではあったが、1名の運営委員からでも疑義や提案があった場合、あるいは、何かをほのめかされた場合であってもその課題を何度も検討し、できるなら実施する姿勢を取り、独善に陥らないように努めた。

振り返ってみると、辞書の研究者を一堂に集める、辞書研究の裾野を広げる、辞書研究を英語学の1分野として学界に認めてもらう、これらの点でいささかでも貢献があったかと思われる。研究社の『英語年鑑』が2001年版から「辞書研究」を項目の1つに入れて当研究会の活動を詳しく記録するようになったことも有り難いことである。研究面ではそのような貢献が少しはあったかと思われるが、実際の辞書作り、辞書の執筆者の拡充という面で何らかの貢献ができたかどうかとなると、これはわからないとしか言えないであろう。

最後に発足当初からうたってきた論文集が刊行できたことはよかったと思う。出版社の承諾を得てくれた南出康世氏、編集事務を一手に引き受けてくれた石川慎一郎氏、巻頭論文を寄せてくれた池上嘉彦氏、投野由紀夫氏、並びに貴重な原稿を寄せてくれたすべての寄稿者の皆様に感謝の意を表したい。

やり残したことはいくつもある。一つは、英語辞書学会の創設である。これは各方面から要望されていたが、英語辞書学、辞書編集における輝かしい成果を残された先生方を見わたすと、どなたを中心に学会を組織すべきかと考えただけで二の足を踏んでしまい、延ばし延ばしにしてしまった。

他の一つは、研究会の有志でプロジェクトを組み、研究発表をし、文部科学省の科学研究費補助金を受けることを心がけてこなかったことである。この点は今後期待したい。

これからは赤須薫氏を中心に新たな体制でさらに研究会が発展することを期待したい。

参考文献

- Akasu, Kaoru. 2007. The Iwasaki Linguistic Circle and Dictionary Analysis. In *Kernerman DICTIONARY News*, No. 15.

- 『英語年鑑』編集部. 2002. 『英語年鑑2001年版』、2002年版、2003年版、2004年版、2005年版、2006年版、2007年版. 研究社.
- 千葉大学外国語センター. 2003. 「村田年教授著書および学術論文等目録」『言語文化論叢』第12号 (村田年教授退官記念号).
- 東 信行. 2003. 「岩崎研究会の歩み」 *Lexicon*. No. 33. Iwasaki Linguistic Circle.
- Ishikawa, Shin'ichiro. 2007. A New Trend in Lexicography from Japan. In *Kernerman DICTIONARY News*, No. 15.
- The JACET Society of English Lexicography, *English Lexicography in Japan*. Edited by S. Ishikawa, K. Minamide, M. Murata and Y. Tono. Taishukan Publishing Company.
- Kernerman DICTIONARY News*. No. 2, 1995; No. 6, 1998; No. 8, 2000; No. 10, 2002; No. 15, 2007. K Dictionaries Ltd.
- McCreary, Don R. 2007. Shin'ichiro Ishikawa, Kosei Minamide, Minoru Murata, Yukio Tono (eds.). 2007. *English Lexicography in Japan*. In *Kernerman DICTIONARY News*, No. 15.
- 南出康世. 1998. 『英語の辞書と辞書学』大修館書店.
- MURATA, M., S. YAMADA and Y. TONO (eds.). 2003. ASIALEX '03 Tokyo Proceedings: *Dictionaries and Language Learning: How can Dictionaries Help Human & Machine Learning?* The Asian Association for Lexicography.
- The Organizing Committee of 12th World Congress of Applied Linguistics (Tokyo). 2000. *Report on AILA '99 Tokyo—Statistics and a Summery—*. AILA, 99 Tokyo Organizing Committee.
- Pakir, Anne (ed.). 2005. *ASIALEX 2005 Words in Asia: Cultural Contexts*. Department of English Language and Literature, National University of Singapore.

辞書学を中心とした 村田年研究業績 (最近5年間)

5年前の千葉大学退職時までの研究業績一覧は千葉大学外国語センター紀要に掲載されているので、その後の5年間の研究業績を、当研究会と密接な関係を持つものとしてまとめて以下に掲載する。

(著書・論文等)

2003年3月. 『大学英語教育学会基本語リスト』大学英語教育学会. (共著)(編集委員長)131 pp.

- 2003年 8月. ASIALEX '03 Tokyo Proceedings: *Dictionaries and Language Learning: How can Dictionaries Help Human & Machine Learning?* (Editor) The Asian Association for Lexicography. 499pp.
- 2003年 8月. Background of Revision of JACET Word List. In Murata (2003). pp. 356-59.
- 2003年12月. 「日英語の比較研究から英語学習辞書の研究へ」『言語文化論叢』第12号. 千葉大学外国語センター. pp. 17-30.
- 2004年 1月. 書評:『英語語彙の指導マニュアル』(望月正道・相澤一美・投野由紀夫著. 大修館書店). 『英語教育』第52巻11号. p. 88.
- 2004年 3月. 『JACET8000活用事例集』(編集委員) 大学英語教育学会. 68pp.
- 2004年 3月. 「語彙指導の必要性と指導例」『JACET8000活用事例集』大学英語教育学会. pp. 2-6.
- 2004年 3月. 『電子辞書活用ハンドブック』(監修) カシオ計算機株式会社. 72pp.
- 2004年 6月. 「アジア辞書学会大会を終えて」『岩崎研究会ニューズレター』第11号. 岩崎研究会. p. 7.
- 2005年 3月. 『大学生のための電子辞書活用ハンドブック2005』(監修) カシオ教育研究所. 160pp.
- 2005年 4月. 日英言語文化研究会編『日英語の比較—発想・背景・文化』(編集委員長) 三修社. 317pp.
- 2005年 4月. 「コロケーションによる語の意味の分析と記述—日英語比較の観点から—」『日英語の比較—発想・背景・文化—』 pp. 59-66.
- 2005年11月. 『JACET8000英単語』(共著・編集) 桐原書店. 497pp.
- 2005年11月. 『OALD (*Oxford Advanced Learner's Dictionary*) 活用ガイド (辞書編)』(監修) 旺文社. pp. 4-31.
- 2005年11月11日. 「言葉の宝庫と高い検索効率」(書評:『ルミナス英和辞典第2版』及び『ルミナス和英辞典第2版』 研究社) 『週刊読書人』 p. 6.
- 2006年 3月. 「『JACET8000』をスケールとして学習指導要領の制限語彙及び中学校教科書語彙を検討する」(共著) 『和洋女子大学紀要』第46集 (人文系編). pp. 83-103.
- 2006年 3月. 「書評:『新しい文化の形—言語・思想・暮らし』(神奈川大学人文学研究所編. 御茶ノ水書房.)」『人文学研究所報』(神奈川大学人文学研究所) No.39. pp. 116-7.
- 2006年 3月. 『大学生のための電子辞書活用ハンドブック2006』(監修) カシオ教育研究所. 162pp.

- 2006年7月、『オックスフォード ワードパワー英英辞典 [第3版] 活用ガイド (辞書編)』
(監修) 旺文社. pp. 2-19.
- 2006年7月. 日英言語文化研究会編『日英語の比較—発想・背景・文化』第2版. (編集委員
長) 三修社. 317pp.
- 2006年12月. 『『大学英語教育学会基本語リスト』に基づく JACET8000英単語 Check-
mate』(共著・編集) 桐原書店. 215pp.
- 2006年12月. The JACET Society of English Lexicography, *English Lexicography in Ja-
pan*. (編集委員長) 大修館書店. 326pp.
- 2007年3月. 「高校生用電子辞書及び英語充実型の大学生・一般社会人用電子辞書について
の比較研究」(共著)『和洋女子大学紀要』第47集 (人文系編)、pp. 83-103.
- 2007年3月. 「学習語彙表の歴史」『大規模コーパスを用いた日本人英語学習者用の語彙リス
ト構築と教材分析システムの開発』(平成16-18年度文部科学省科学研究補助金基盤研究(B)
研究課題番号 16320076 研究代表者 相澤一美 (東京電機大学)) (研究分担者として)
pp. 22-36.
- 2007年4月. 『大学生のための電子辞書活用ハンドブック2007』(監修) カシオ教育研究所.
193pp.
- 2008年3月. (予定) 日英言語文化研究会編『日英言語文化と英語教育—多様な視座を求め
て』(編集委員長) 三修社.
- 2008年3月. (予定) 「表層の意味と裏の意図—日英語の談話における話し手の合図」日英言
語文化研究会編『日英言語文化と英語教育—多様な視座を求めて—』三修社.
- 2008年3月. (予定) 「JACET (大学英語教育学会) 英語辞書研究会小史 (1995年12月-2007
年3月)」『和洋女子大学紀要』第48集 (人文系編).

(研究発表・講演等)

- 2003年9月. 「日英語の比較から辞書研究・語彙研究へ」(招待講演) 大学英語教育学会第42
回大会.
- 2003年9月. シンポジウム「JACET8000の活用と応用研究」の提案者の共同研究者として.
大学英語教育学会第42回大会.
- 2003年12月. 「学習辞典における語用論的記述—その現状、意義、将来の方向」(招待講演)
大塚英語教育研究会例会.
- 2004年3月. 『『電子辞書活用ハンドブック』編集雑感—辞書指導・語彙指導について』電子

- 辞書研究会第1回公開大会。早稲田大学にて。
- 2004年7月。「電子辞書の概要及び基礎編」(講演)(大学・高専教員向け電子辞書講習会) 早稲田大学にて。
- 2004年8月。「電子辞書を取り巻く状況と辞書指導・語彙指導のあり方」(講演)(語彙リスト構築科研プロジェクトの公開講座) 県立長崎シーボルト大学にて。
- 2004年9月。「[JACET8000をスケールとして学習指導要領の制限語彙及び中学校教科書語彙を検討する」(シンポジウム:[JACET8000に基づく語彙の応用研究]の提案者として) 大学英語教育学会第43回大会。中京大学にて。
- 2004年12月。「電子辞書を取り巻く状況と電子辞書指導の基礎」(講演)(英語教師のための電子辞書講習会) キャンパスプラザ京都にて。
- 2004年12月。「学習指導要領と中学校教科書の語彙から見た日本の英語教育の特質と語彙指導の留意点」(講演)(財団法人語学教育研究所2004年度冬期講習会) 東京都文京区民センターにて。
- 2005年3月。「電子辞書の発展と辞書指導の必要性」(講演)(電子辞書研究会例会) カシオ教育研究所にて。
- 2005年3月。「電子辞書の発展と辞書指導の必要性—『電子辞書活用ハンドブック2005』の編集作業から」(JACET英語辞書研究会・英語語彙研究会合同ワークショップ:英語の辞書・語彙) 東京電機大学にて。
- 2005年6月。「携帯型電子辞書の普及と辞書指導の必要性」(シンポジウム「電子辞書について」の司会兼提案者として) 日本英語表現学会。比治山大学にて。
- 2005年8月。「表層の意味と裏の意図—日英語の談話における話し手の合図」日英言語文化研究会第2回例会。明治大学にて。
- 2005年12月。「英語教育・英語研究40年間に考えたこと、感じたこと」(講演) 千葉県立佐原高等学校にて。
- 2005年12月。「日本語と英語における情報伝達の順序の違い」(市川市民講座) 市川中央公民館にて。
- 2006年3月。「『電子辞書活用ハンドブック2006』の編集と辞書指導—最新の電子辞書と大学生の英語力との乖離—」第5回電子辞書研究会。カシオ計算機株式会社にて。
- 2006年3月。「電子辞書の最前線と辞書指導—大学生、高校生、中学生、小学生の場合—」JACET第7回英語辞書研究会ワークショップ。和洋女子大学にて。

(人文学部外国語教育研究センター特任教授)